東アジアの思想と構造

泊園文庫の新出印章と藤澤黄坡の印章について

吾　妻　重　二

On New Found Stamps of *Hakuen* Collection and Stamps of FUJISAWA Koha

AZUMA, Juji

There are a lot of stamps in *Hakuen* collection of Kansai University. I published "*Seals of Hakuen collection*" in 2013, but recently 6 stamps were newly found in Kansai University Library. In addition, FUJISAWA Koha's 21 imprints are also left now. In this essay, I'd like to introduce these stamps and add some explanation.

キーワード：泊園書院　藤澤南岳　藤澤黄鵠　藤澤黄坡　印章

はじめに

関西大学の所蔵する泊園文庫は大阪の漢学塾、泊園書院のコレクションである。泊園書院が初代の藤澤東畡（1794-1864）、その長子で第二代の藤澤南岳（1842-1920）、南岳長子で第三代の藤澤黄鵠（1874-1924）、南岳次子で第四代の藤澤黄坡（1876-1948）という「三世四代」の院主の主宰により近世から近代にかけて隆盛したことはすでに周知のところであろう。

この泊園文庫には漢籍をはじめ院主たちの自筆稿本、日記、軸物、その他の関連資料を含む大阪文化の一大宝庫となっている。

ところで、この泊園文庫には印章も多数含まれており、筆者は先般、西泠印社社員で関西大学非常勤講師の陳波氏の協力を得てこれを鈐印、整理して『泊園文庫印譜集――泊園書院資料集成２』（関西大学東西学術研究所資料叢刊29-２、関西大学出版部、全188頁、2013年３月）を刊行した（以下、『印譜集』と略称）。この『印譜集』は、泊園文庫の印章172顆につき、その画像や印影、側款を載せるとともに解説を加えたものである。泊園文庫が本学に寄贈されたのが昭和26年（1951）のことであるから、その後60年余り経ってやっと整理がついたわけで、同書の刊行により肩の荷が一つおりた気持ちであった。

ところが、昨年の2014年６月、これ以外に印章が６顆あるという報告を受けた。泊園文庫の印章はすでに本学図書館から本学博物館に移管され、整理番号も振られているのであるが、この新出の６顆はまだ図書館内にあって博物館には移管されず、よって整理番号も振られていなかった。なぜこのような遺

漏が生じたのか、その理由は今は問わないとしても、172顆が印章のすべてだと考えて『印譜集』を刊行した筆者にとっては驚きであった。ともあれそのようなわけで、泊園文庫の印章は6顆を合わせて、全部で178顆ということになったのである。

ここでは、この新出の6顆につき紹介し、解説を加えることにする[1)]。『印譜集』刊行のあとにこのような文章を書くというのは格好の良いものではないが、致し方のない次第である。

さらに、この機会に黄坡の印章についても触れておくことにしたい。黄坡の印章は泊園文庫にはなく、所在不明であるが、その印影が現在、少なからず伝わっているからである[2)]。

一　新出印章6顆について

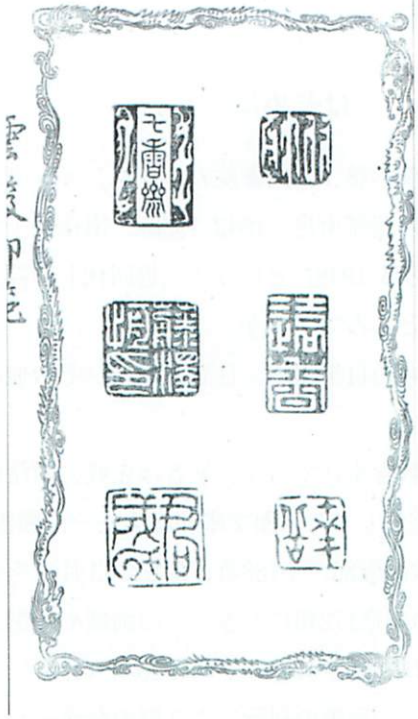
今般新たに見出された印章は次の6顆である。(　) 内は図書館における仮の整理番号である。

1 (735)　七香齋

作者未詳。印面3.8センチ×2.5センチ。七香斎は南岳の号。本印は木邨鉄畊編『雲笈印範』(1902年) に載る。木邨鉄畊は防州 (山口県) の人で、明治22年 (1889) から諸士をあまねく訪ね、印章を本人から直接借りて捺印し、明治期を代表する総合印譜集『雲笈印範』全八冊を成した。

印章1

印章1　印影



木邨鉄畊編『雲笈印範』に載る印章1の印影 (左上)。

印章1　印面

1) この6顆の印面および側款の鈐拓は松浦典子氏の協力による。感謝申し上げたい。

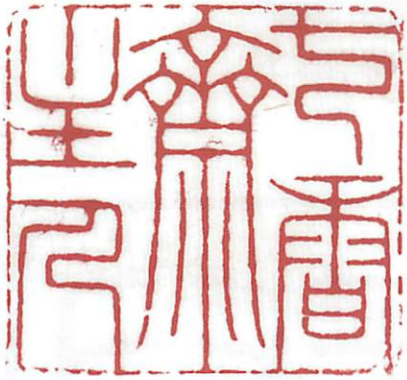
2) 以下、印影については、すべて原寸大で載せた。

2（736）　七香齋主人

側款：　平生七戒
　　子孫昌宜
　　大吉宜子洗文

作者未詳。印面4.8センチ×5.2センチ。「平生七戒」とは仏教でいう八戒（八戒斎）のうち最後の「不過中食」（午後以降は翌日朝まで食事をしない）を除いた七つの戒を守るということか。七つの戒とは不殺生、不盗、不淫、不妄語、不飲酒などの禁忌をいう。「子孫昌宜」は青銅器などの「大吉宜子洗」（洗は手洗いの器）に刻まれていた文字らしい。中国書道協会理事の李寧先生の教示による。

印章２



印章２　印影

印章２　側款

印章２　印面

3（737）　藤澤恒印　君成

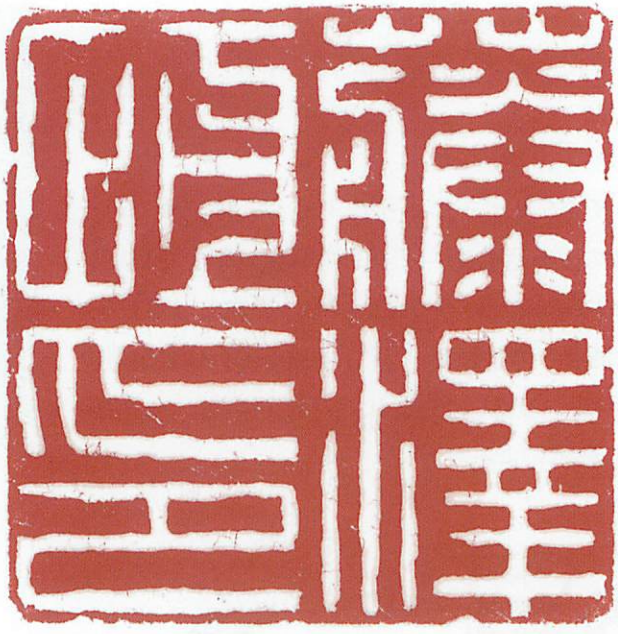
側款：　乙未孟春　爲　南岳先生清囑　石農邨美作

両面印。印面8.1センチ×8.1センチ。明治28年（1895）、中村石農作。側款に「南岳先生の清嘱の為に」とあるので、南岳の要請によって作られたことがわかる。中村は名は正美、南岳と同郷の四国讃岐（香川県）の人で、泊園印章29の作者。『福禄寿印譜』あり。同書には三島中洲とともに、南岳が序文を書いている。

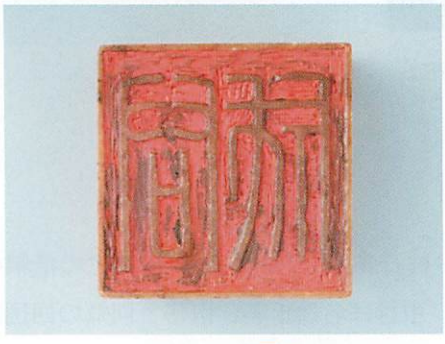
印章３

印章３　側款

印章３　印面Ａ



印章３　印影Ａ



印章３　印面Ｂ

印章３　印影Ｂ

４（738）－１　元字士亨

側款：　黄鵠先生博粲　丙辰一月於金石居　仿漢人法　笛州

４（738）－２　黄鵠

側款：　朱文亦漢人法也　笛州同

４（738）－３　己大物小

側款：　己大物小　笛州同

珍しい黄鵠の印章。組印。木製の箱に入る。4－1は印面3.7センチ×3.6センチ、4－2は印面3.6センチ×3.6センチ、4－3は印面4.2センチ×2.1センチ。「博粲」の博は得る、粲は笑う。「笑納」と同様、「博粲」でお笑いくださいという謙辞。

元は黄鵠の名、士亨はその字。本印は大正5年（1916）1月、河西笛洲の作。河西（1883-1947）は名は由、また義弘。甲斐（山梨県）の人で号は笛吹川にちなむ。大阪に住んだ。泊園印章31, 66, 99の作者でもある。印譜集に『酔翁亭記印譜』、『帰去来印譜』がある。

『印譜集』でも述べたように、泊園文庫のおびただしい印章コレクションはほとんどすべてが南岳のもので、なぜか東晹の印章は一点もなく、黄坡のものもまったく含まれていない。南岳の印章以外は、黄鵠のものがここに挙げた三点あるだけである。これは南岳がいかに印章の愛好者だったかを示すとともに、南岳の所持品が泊園関係者によって大切に守られてきたことを物語るであろう。一方、東晹や黄坡が印章を持っていたことは彼らの書画の落款や後述する印影の存在からわかるのであるが、ただし彼らは印章の収集や保管に対して南岳ほどこだわりを持たなかったようである。

印章4－1、4－2、4－3（左から）

印章4－1　側款

印章4－1　印面

印章4－1　印影

印章4－2　側款

印章4－2　印面

印章4－2　印影

印章4－3　側款

印章4－3　印面

印章4－3　印影

二　黄坡の印章について

さて、黄坡の印章については現在、大阪府藤井寺市にある道明寺天満宮に印影が21点伝わっている。同宮は南岳および泊園書院ゆかりの地であり、明治時代に南岳によって始められた釈奠が百年以上経った今でもなお挙行されていることは周知のとおりである。同宮の南坊城充興氏によれば、かつて藤澤家から印章を借りて印面を捺し、この印譜を作ったとのことであるが、今のところ藤澤家においてこれらの印章の存否は不明である。これらは印影がまとまっていることから、黄坡所有の印章と見てよいと思われる。

以下、この21点につき紹介する。おおむね小印なので、まず各印章の情報をまとめて述べ、次に印影を連続して載せことにする[3]。道明寺天満宮に伝わるメモには作者名の記載もあり、おそらく印章の側款などによったものであろう。貴重な情報なので、これについてもあわせて記しておく。

3）印面の釈文に関しては水田紀久先生から一部教示を賜った。感謝申し上げたい。

先述したように、泊園文庫の中に黄坡の印章は１点も含まれていないので、これらの印影はたいへん貴重なものである。

黄坡印章１　**章印**　印面1.3センチ×1.3センチ　黄坡の名は章次郎であるが、中国ふうに章の一字を名のることも多い。

黄坡印章２　**士明**　印面1.4センチ×1.4センチ。士明は黄坡の字。

黄坡印章３　**章印**　印面2.4センチ×2.3センチ。

黄坡印章４　**字士明**　印面2.3センチ×2.3センチ。

黄坡印章５　**藤澤章印**　印面3.8センチ×3.8センチ。

黄坡印章６　**士明氏**　印面3.8センチ×3.8センチ。

黄坡印章７　**章字士明**　印面2.1センチ×2.1センチ。河西笛洲作。河西については上述の黄鵠印を参照。

黄坡印章８　**黄坡**　印面2.2センチ×2.2センチ。河西笛洲作。

黄坡印章９　**章士明**　印面1.8センチ×1.8センチ。近藤尺天（石顚）作。近藤は泊園印章54,41の作者。

黄坡印章10　**黄坡**　印面1.8センチ×1.8センチ。近藤尺天作。

黄坡印章11　**怡顔**　印面2.0センチ×1.2センチ。近藤尺天作。「顔を怡（よろこ）ばす」は、陶淵明「帰去来の辞」に「眄庭柯以怡顔」（庭柯を眄（なが）めては以て顔を怡ばす）とあるのによる。

黄坡印章12　**世間樂事**　印面3.0センチ×1.2センチ。藤本煙津作。藤本は泊園印章11,16,17,18,20,26,37,38,40,42,56,57,58,59,94,100の作者。「世間樂事」は文章を思うがままに作ることほどこの世で楽しい事はない、と豪語した北宋・蘇軾の語。『春渚紀聞』巻６「東坡事実」の条参照。

黄坡印章13　**高櫟**　印面2.8センチ×1.1センチ。「高櫟」は『荘子』人間世篇の「櫟社」の寓話によるか。土地神の廟に茂る巨大な櫟は何の役にも立たないが、それゆえにこそ切り倒されることもなく長寿を保っているとして、無用であるがゆえの価値を説く。

黄坡印章14　**咲と子**　印面1.9センチ×1.4センチ。道明寺天満宮のメモに作者を「靈鳳」とする。根岸霊鳳のことか。根岸は明治15年（1882）、南岳が大阪天満宮内に作った漢詩の会「浪速菅廟吟社」で漢詩人として活躍したというが、詳細は不明[4]。

黄坡印章15　**泊園文庫**　印面2.8センチ×2.8センチ。道明寺天満宮のメモに作者を「靈鳳」とする。

黄坡印章16　**黄坡**　印面1.3センチ×0.8センチ。近藤尺天作。

黄坡印章17　**雲鶴有奇翼**　印面2.3センチ×2.3センチ。河西笛洲作。「雲鶴に奇翼有り」は陶淵明の詩「連雨独飲」の句。

4）浪速菅廟吟社については、http://zenkanren.sakura.ne.jp/02toukoukikou/25zuisou/2546nijunennodentou.htmlを見られたい。

黄坡印章18　**春人藏玉**(王カ)　印面3.9センチ×1.0センチ。河西笛洲作。春人は春に遊ぶ人。蔵玉は邵雍『伊川擊壤集』巻7の「逍遥吟」に「石裏時藏玉、砂中屢得金」(石の裏には時に玉を蔵し、砂の中には屢しば金を得)という。春の遊びを楽しむ人は玉のごとき美質をもつという意か。

黄坡印章19　**八秩開二**　印面2.2センチ×2.2センチ。河西笛洲作。秩は十年間を意味し、「八秩開二」で八十二歳ということのようである。ただし、黄坡は七十三歳で死去しているから、別人のことをいったものか。

黄坡印章20　**士明氏**　印面2.4センチ×2.4センチ。河西笛洲作。

黄坡印章21　**藤澤章印**　印面2.4センチ×2.4センチ。河西笛洲作。

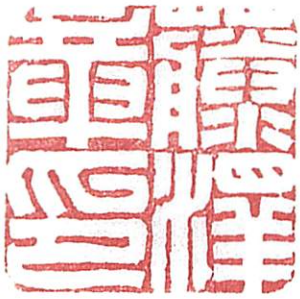
＊本稿は本学の「平成二十六年度　創立一三〇周年記念特別研究費(なにわ大阪研究)」の研究課題「関西大学の知的ルーツ「泊園書院」の調査と研究」助成による成果の一部である。

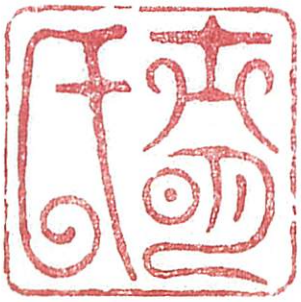
黄坡印章 1

黄坡印章 2

黄坡印章 3

黄坡印章 4


黄坡印章 5


黄坡印章 6

黄坡印章 7

黄坡印章 8

黄坡印章 9

黄坡印章10

黄坡印章11

黄坡印章12

黄坡印章13

黄坡印章14

黄坡印章15

黄坡印章16

黄坡印章17

黄坡印章18

黄坡印章19

黄坡印章20

黄坡印章21